

No. 57

September.
20252016年
朝日がん大賞
受賞2005年
保健文化賞
受賞

NEWSLETTER

第34回学術集会
開催報告

ITO Hidemi

伊藤 秀美

愛知県がんセンター
JACR 理事（教育研修委員長）

日本がん登録協議会第34回学術集会は、2025年6月5日(木)・6日(金)の2日間にわたり、愛知県名古屋市のウインクあいちにて開催されました。参加登録総数は現地参加者ならびにオンデマンド配信視聴者を合わせて383名にのぼり、実務者研修会には274名、学術集会には364名の方々にご参加いただきました。全国から多数のがん登録関係者の皆様に名古屋にお越しいただき、対面ならではの活発な情報共有と意見交換が行えたこと、心より御礼申し上げます。

今回の学術集会は、全国がん登録の施行から10年という節目にあたり、「がん登録に基づく予防・疫学研究の深化と拡張」をテーマに掲げました。がん登録情報の利活用によるがん予防や医療政策の発展に加え、疫学研究の紹介や国際的な展開の現状と課題など、さまざまな視点から議論が交わされました。

学術委員会企画のシンポジウムでは、現在進行中の政策課題である「医療の集約化」を取り上げ、関連する立場から演者をお招きしました。本企画は、学術委員会の皆様による熱意と丁寧なご準備により実現したものであり、各演者からは非常に踏み込んだご発表をいただきました。座長、演者、参加者の間で交わされた活発な議論を通じて、がん登録情報が「医療の集約化」の中で果たしうる役割について、改めて考える貴重な機会となりました。

学術集会企画のシンポジウムでは、大会長がこれまで取り組んできたがん登録情報を活用した疫学研究の実績を踏まえ、記述疫学にとどまらない研究の広がりや今後の展望について、国内の第一人者にご講演いただきました。それぞれの演者からは、国際共同研究の経験とともに、がん登録情報の国際的な活用における課題や展望も共有され、がん登録情報を基盤とした研究のさらなる発展可能性が示されました。

実務者研修会では、院内がん登録および全国がん登録のデータを活用した解析に焦点を当て、実務者や行政担当者に役立つ知識や手法について、実践的な講義が行われました。多くの参加者が熱心に耳を傾け、解析力向上への関心の高さがうかがえました。

毎年好評の情報交換会「実務でGo!」では、現場で直面している課題や工夫について自由に意見を交わす時間が設けられ、所属や経験年数の垣根を越えて、多くの実務者同士のつながりが生まれました。参加者からは、「他施設の実践から多くのヒントを得られた」「同じ悩みを共有できて励みになった」といった声が寄せられ、今後の業務改善やモチベーション向上にもつながる場となりました。

一般演題セッションでは、全国から59題(口演・ポスター)の演題登録があり、がん登録情報を活用した疫学研究や院内・全国がん登録室の活動や取り組みなど、幅広いテーマが取り上げられました。

あわせて、日本がん登録協議会の委員会活動に直結するセッションも企画されました。国際交流委員会のセッションでは、日本から提供された大規模国際共同研究CONCORD-3のデータを用いて、部位別に詳細な生存率評価を行う最新の活動報告がなされました。日本のがん登録データが国際的にも信頼され、実際に活用されていることを再認識するとともに、がん対策・医療の質を客観的に評価する貴重な機会となりました。J-CIP委員会のセッションでは、地域のがん対策におけるがん登録データの活用について、がん患者さんを交えた多角的な議論が展開され、活動の社会実装やその社会的意義を改めて認識する機会となりました。

また、情報交換会では113名もの皆様にご参加いただきました。都市部開催の利点を活かし、会場はアクセスの良い場所に設定し、洗練された雰囲気の中で日頃なかなか言葉を交わせない他施設の方々との交流が深まりました。後半にはビンゴ大会も行われ、終始和やかで笑顔あふれるひとときとなりました。情報交換会での懇親を通じて、がん登録をめぐる実務や研究のつながりが、より一層広がる機会となりました。

本学術集会の開催にあたっては、多くの関係者のご支援とご協力のもと、無事に実施することができました。改めて、参加者の皆様、演者・座長の皆様、プログラム委員会の皆様や事務局のスタッフに心より感謝申し上げます。

本学術集会が、皆様の実務や研究に少しでもお役に立てる機会となっていれば幸いです。引き続き、がん登録に関わる皆様のご活躍を心より応援しております。

学術委員会企画シンポジウム

がん対策を支えるがん登録

令和7年6月6日、第34回学術集会（愛知）において、学術委員会企画シンポジウム「がん対策を支えるがん登録③～がん診療の集約化」の座長を学術委員会の寺本理事とともに担当しました。

数年ぶりの現地開催となった第32回学術集会（青森）で復活した「学術委員会企画シンポジウム」は、第21回（高知）から第26回（愛媛）までの学術集会で毎回設けられていました。令和2年に私が学術委員会委員長を引き継いだ際、学術集会では開催地の特色を持たせる一方、一貫性を考慮したセッションを設けることがJACRとして望ましいと申し送られていました。

学術委員会でテーマと演者を選定し、厚生労働省がん・疾病対策課の北國先生による基調講演、続いて集約化が進む小児がん拠点病院・連携病院の現状を松本先生（国立生育医療研究センター小児がんセンター）、大阪府がん登録を用いた均てん化と



集約化に関する分析例を島津先生（大阪国際がんセンターがん対策センター）に発表いただきました。昨年度の反省から演者を絞り、演者と座長による事前打ち合わせを復活させました。伊藤学術集会会長から、「座長・演者の先生方のご意向によりオンデマンド配信を行わなかったことで、非常に踏み込んだお話を伺うことができ、大変有意義なセッションとなりました」とお礼がありました。会場の方とともにデリケートな課題に対して踏み込んだ議論ができる場になって良かったと思います。

学術委員会企画シンポジウムでは、第32回（青森）「①がんと診断されたら…受療動向を知る」、第33回（島根）「②第4期がん対策推進計画へのがん登録の活用」と、これまでの3回、行政担当者にとっても関心があるテーマを取り扱っています。来年、第35回（鳥取）での「がん対策を支えるがん登録④」にもご期待ください。

MIYASHIRO Isao

宮代 勲

大阪国際がんセンター がん対策センター
JACR 副理事長・学術委員会委員長

学術集会企画シンポジウム

第34回学術集会

疫学研究におけるがん登録データの活用と国際共同研究の未来

シンポジウムの座長を終えて

学術集会企画シンポジウムは、がん疫学研究者である伊藤秀美会長の肝いりで、疫学研究におけるがん登録データの活用と国際共同研究の未来をテーマに、6人の演者に話題提供いただきました。

中田佳世先生からは、全国がん登録情報を用いた小児がんの記述疫学研究において、全国がん登録データの国外提供の制限により国際共同の研究や統計調査へのデータ活用ができていないこと、また南哲司先生からは院内がん登録情報を用いた希少がんの診療実態の把握の現状についてお話いただきました。松田智大先生からは、院内がん登録情報を用いた国際共同研究として、欧州ではClinical Registryとして住民ベースがん登録データに臨床情報を付加して偏りのない医療のベンチマーキングを行う仕組みが一般的で、将来欧州全体の政策、研究、創薬への利活用を目指している事例が紹介されました。澤田典絵先生からは全国がん登録情報をアウトカム情報として用いた住民ベースコホート研究を国際共同研究に用いる意義と国外提供が認められていない現状・課題についてお話いただきました。松尾恵太郎先生からは院内が

INOUE Manami

井上 真奈美

国立がん研究センターがん対策研究所



ん登録情報をリンクし多くのインパクトの高い成果をだしている大規模病院疫学研究が、がん登録法の制限により国際共同研究へ利活用できていない現状について語られました。さらに、梅沢淳先生からは、国外データ提供ができない現状における打開策としてのリモート解析の実現可能性と課題について話題提供がありました。

全国がん登録が発足した暁には国際統計への貢献や国際共同研究への参画増加など多くの期待がありましたが、現実にはそうはなっておらず、その課題を「冷静」に整理しあうことのできたい機会となりました。残念だったのは、あまりに密度が濃く、討論の時間がほとんど残っていませんでした。また必ず続きを再開したいものです。



がん登録実務者研修会 in 愛知

がん登録担当者研修会報告

KANEMURA Seiki

金村 政輝

宮城県立がんセンター研究所 / JACR 理事



今回の研修会は、「がん登録実務者・行政担当者が知っておきたい統計解析のポイント」というテーマで、学術集会初日の午前中に開催され、265名が参加しました。

ファシリテーターの大木いずみ氏（埼玉県立大学）と田中里奈氏（弘前大学）から研修会の企画についての説明があり、全国がん登録情報活用編に入りました。金村から都道府県がん登録室における集計の意義と必要性を説明しました。佐藤雅子氏（秋田県総合保健事業団）は、秋田県のデータを使った集計の実際について、利用手続き、データの選択、加工、集計作業、グラフの選択、見せ方の工夫について説明しました。田中氏は、公表されている全国がん登録データと NDB オープンデータを使い、今後、罹患者のピーク年齢の高齢化が進み、医療需要が急性期から慢性期へシフトすることを示し、地域の課題を明らかにするため、各県での集計が重要であることを指摘しました。

続いて、院内がん登録情報活用編では、松本吉史氏（大

阪医科薬科大学病院）が公開情報の活用方法と自施設のがん登録情報からの対象症例の抽出と集計の概要について説明しました。その後、大塚理可氏（岡山大学病院）と神谷里佳氏（公立西知多総合病院）が大学病院と一般病院それぞれの立場から高齢者に対するがん治療をテーマに、大腸がんを例にした集計結果について講演しました。大塚氏は、県内外からの患者が受診する大学病院において、高齢患者にも手術が行われていること、一方で、術後 stage III の症例では術後化学療法の施行率は高齢者では減少していることを説明しました。神谷氏は、患者の多くが知多半島医療圏の患者であり、高齢患者では経過観察となる症例が多いものの、病期別では積極的な治療が行われており、地域の基幹病院・がん診療連携拠点病院としての役割を果たしていることを説明しました。

今後、自地域・自施設を対象として様々な集計が行われることを期待しています。

実務で Go!



ISA Nana

伊佐 奈々

琉球大学病院がんセンター



日本がん登録協議会第34回学術集会 愛知大会のプログラムの一環として、学術大会 1 日目（2025 年 6 月 5 日）に『がん登録実務者情報交換会 実務で Go!』を開催しました。

私は、初めて運営担当として参加しました。

今回の「実務で Go!」は、123 名（ファシリテーター 22 名含む）という多くの方に参加していただきました。今年のテーマは、①登録実務（Case Finding・運用）、②統計解析、③集約（全国がん登録）、④運営（研修会、会議など）、⑤報告書、⑥人材育成の 6 つで構成し、15 グループに分かれて交流会を行いました。ファシリテーターの皆さんのおかげもあり、自己紹介の時点から実務者同士の会話は非

常に盛り上がり、和気あいあいとした雰囲気です。グループで日頃の悩みごとを「そうだよなー!」と共有したり、好事例を必死にメモしたり、交流会後も盛り上がりや冷めやらぬまま会場を後にする姿が印象的でした。

交流会後のアンケートでは、95% が「満足」および「また参加したい」とあり、大変好評を得ました。また、「実務の経験なし」「1 年未満」「1 ～ 3 年」などの実務経験が浅い方も多く参加してくれており、経験年数や役職にとらわれることなく、お互い楽しく交流し、学び合うことができました。

一部ではありますが、以下の意見や感想が寄せられました。

・登録室で同じ業務をしている職員

がいないため、他県の取り組みや課題を共有でき、また名刺交換ができて良かった。

・様々な施設の現状や課題を知ることができ共感できたことは、励みになった。

・はじめての参加だったが、他県の実務者の方と交流できて有意義な時間となった。

・グループのローテーションがあるのとより多くの方と話せるので検討してほしい。

アンケート結果でも好意的な意見が多く、当初の目的をある程度達成することができました。今度も、業務の情報や悩みを共有できる交流の場である「実務で Go!」に是非参加していただきたいと思います。

第34回学術集会を終えて

MATSUO Keitaro
松尾 恵太郎
愛知県がんセンター



学術集会に数多くの方に参加いただきましたこと、大会事務局長として心より御礼申し上げます。また、開催に当たりご協力を頂きました皆様にも心より御礼申し上げます。

私自身はがん登録には関りつつも日本がん登録協議会そのものとは御縁はありませんでした。そういう中、伊藤秀美先生が大会長を引き受けられ、長年の研究の相棒のアシストをするべく事務局長を務めさせて頂きました。大会の企画は殆ど伊藤先生の手によるもので、私自身は大会準備に関しては裏方に徹しました。大会中は、万事おとなしめの大会長の代わりにディスカッションを盛り上げる、というところに注力したつもりです。無事盛会に終わってホッとした、という事に尽きます。

学術集会企画シンポジウムの中で私自身が演者として触れましたが、私の疫学研究者人生においてがん登録が常に傍らにありました。その殆どがユーザーとしてではありましたが、一時期は運営側でもありました。第3期対がん10カ年戦略の通称祖父江班の班員として地域がん登録の標準データベース体制に関わる事が出来たのは、ユーザーとして視点以外のものを知る得がたい経験でした。その時一緒にやっていた方々には戦友に近い想いを抱いており、学術集会でそうした方々ももてなすことができたのは、事務局長冥利に尽きることでした。人生で

初めてビンゴゲームの司会をしたのも、あまりそういうキャラをやったことがなかったので良い経験でした。

私個人は全国・院内どちらのがん登録も、それ単独あるいは他のデータと組み合わせる事によって、より多くの新しい知識を生み出すポテンシャルを持っていると信じています。それを生かす仕事を私自身は続けていきたいと思っています。それと同時に日本がん登録協議会がその基盤であり続ける事を願っています。



東北大学病院における有事による がん登録への影響の検証

ABE Maiko
阿部 舞子
東北大学病院



この度の日本がん登録協議会第34回学術集会で、最優秀ポスター賞を頂戴し誠に光栄に存じます。この場をお借りして、ご指導いただいた諸先生方、審査いただいた学術委員会委員の皆様と大会長の伊藤先生に心より感謝申し上げます。

今回の発表内容は、有事を東日本大震災と新型コロナウイルス感染症に絞り、有事が当院のがん登録へ与えた影響を検証しました。

結果、東日本大震災後で増加率1位の部位は、32.6%増の多発性骨髄腫(7件)、2位は24.2%増の大腸がん(46.5件)、減少した部位の上位は、婦人科系の子宮頸癌と卵巣癌でした。大腸がんの医療圏別分析では、津波が発生した石巻・登米・気仙沼の患者が増加し、臨床ステージ別では0期と不明がんが増加していました。

コロナ禍では、増加率48.2%の白血病(26.5件)が1位で、宮城県がん登録でも12.2%増加(28.5件)していましたが、宮城県の増加は、ほぼ当院の登録件数が

反映されていました。この結果について血液免疫科の医師からは、コロナ禍前は無治療経過観察扱いの患者が不安になり当院への来院が増えた可能性があるという回答があり、詳細を確認したところ、骨髄異形成症候群に伴う急性白血病及び慢性骨髄性白血病が増えていました。また、今回行った分析は、各有事前後の2年間の平均で比較しましたが、コロナ禍においては平均の比較では評価が難しい部位があると気づくことができました。

なお、当院は今までの災害を教訓とし、診療情報のDXの推進等、有事に向け備えておりますが、今後も高いデータ精度を維持し、各種学会等へ向け情報発信ができるよう分析に努めてまいります。



統合失調症を併存している患者に 対するがん医療の状況評価 — 大阪府内の多施設データベース研究

SHIMADZU Mizuki
島津 美寿季
大阪国際がんセンター



この度の日本がん登録協議会第34回学術集会にて、最優秀口演賞をいただき、大変光栄に存じます。

第四期がん対策推進基本計画では、誰一人取り残さないことが目指されていますが、精神疾患を持つ患者さんはそうでない方と比べて、標準的ながん治療を受けにくい実態が報告されています。特に統合失調症は、一部のがんとの関連も指摘されており、適切な支援体制の整備が急務です。本研究では、統合失調症の有無によらずにがん患者さんが医療を受けられているかどうかを評価しました。対象は、大阪府内の69のがん診療拠点病院等の院内がん登録と診療情報データをリンクしたCanReCOデータベースに登録された、2019年から2022年にがんの診断・入院治療を受けた約22万人(そのうち統合失調症の併存患者は0.6%)です。

観血的治療を受けた割合や薬物療法を受けた割合を比較したところ、併存群と非併存群でそれぞれ、60.1%対67.1%、36.0%対43.6%で、いずれも併

存群は非併存群より有意に低値を示し、進行がん割合は、61.5%対52.2%で有意に高値でした。がんの診断の1年後の生存率に関しても、79.5%対88.0%であり、統合失調症併存が予後不良と関連する可能性が示唆されました。

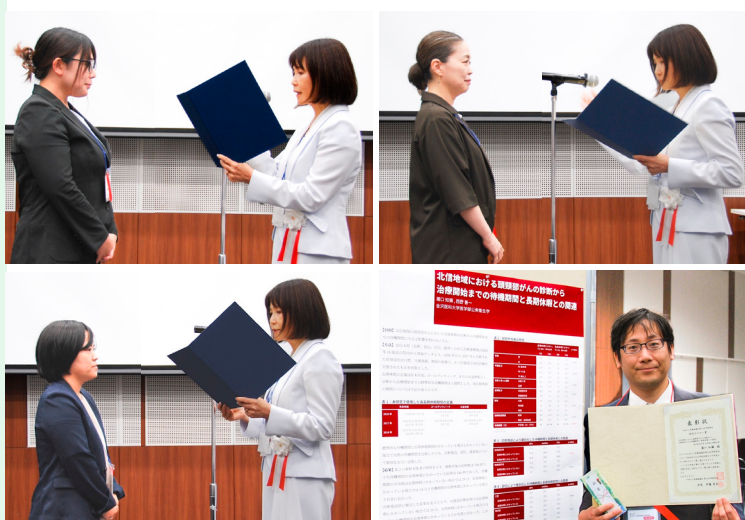
これらの結果から、統合失調症を併存する患者では、がん診断時の進行度が高い傾向に加え、初期治療導入率が低いため、生存率が低下していると考えられます。精神科と腫瘍治療科の連携強化や、ケースワーカーを含む多職種によるサポート体制の構築が、予後改善に寄与すると期待されます。

最後になりましたが、データ収集にご協力をいただいた大阪府がん診療連携協議会参加医療機関のがん登録室の皆様、ご指導いただいた共同演者の先生に御礼申し上げます。今後も、合併症を併存する患者さんへの包括的ながん医療支援の実現に向けた研究に真摯に取り組んでまいります。

特別ポスター賞のご紹介

第34回日本がん登録協議会学術集会には、一般演題として口演・ポスターあわせて59演題という、例年にも増して多数のご登録をいただきました。日々業務や研究に取り組まれている皆様が、それぞれの課題意識をもって実施された報告や成果をこの場で発表してくださったことに、学術集会長として心より御礼申し上げます。

今回の学術集会では、第32回学術集会に倣い、学術委員会が選考する「最優秀口演賞」「優秀口演賞」「最優秀ポスター賞」「優秀ポスター賞」に加え、学術集会長の推薦により、プログラム委員とともに選出する「特別ポスター賞」を設けました。



この賞は、がん登録室の皆さんが日々工夫しながら積み重ねている業務の知見や、今後の発展が期待される研究報告を評価することで、がん登録室の活動や研究のさらなる活性化につなげたいという思いから創設されたものです。学術集会の準備段階からプログラム委員の皆様にも趣旨にご賛同いただき、正式に表彰として実施することができました。

今回はポスター発表演題の中から、プログラム委員による評価をもとに、特に注目すべき内容を発表された演題を選出し、「院内がん登録」「全国がん登録」それぞれの分野における研究成果・活動報告から、以下の4演題が特別ポスター賞を受賞しました。筆頭演者の皆様、おめでとうございます。

●「各施設版から改良した、県内多施設で共有できる『院内がん登録・国がん提出前チェックリスト』の作成」
檜崎 千明さん（独立行政法人国立病院機構四国がんセンター医療情報管理室）

●「市町村による全国がん登録情報の活用支援における集計方法」
佐藤 洋子さん（宮城県立がんセンター 宮城県がん登録室）

ITO Hidemi
伊藤 秀美

愛知県がんセンター
JACR 理事（教育研修委員長）



●「北信地域における頭頸部がんの診断から治療開始までの待機期間と長期休暇との関連」
瀧口 知彌先生（金沢医科大学）

●「COVID-19の蔓延が日本の癌罹患数に与えた影響」
田中 里奈先生（弘前大学）

檜崎さんの発表は、国がん提出前の目視確認項目を共通化し、実務者の経験の違いによる記録の揺れや精度の偏りを減らすことを目的に、既存のリストを整理・改良して誰もが使いやすいチェックリストを作成した点が実践的でした。リストは、登録ルールの再確認や教育的な補助機能も果たす内容となっており、今後の継続的な更新による活用の広がりも期待されます。

また、佐藤さんの発表は、宮城県では活用が進んでいなかった19条の申請を市町村に代わってがんセンターが一括して行い、分かりやすいリーフレットや詳細集計表を効率的に作成・提供することで、自治体による情報の利活用と公表を後押しした点が高く評価されました。

瀧口先生は、北信地域における院内がん登録情報を用い、頭頸部がん患者の待機期間が長期休暇の影響を受けていることを明らかにしました。この知見は、今後の診療調整や医療リソースの配置に直結する実践的な成果といえます。

田中先生は、全国がん登録の公表データを用いて罹患数の変動を捉え、COVID-19 パンデミック後の影響を定量的に分析しました。これにより、がん検診の重要性や医療アクセス維持に関する課題が浮き彫りとなり、社会的にも意義のある成果として評価されました。

今回の学術集会での発表を通じて、日頃の取り組みや工夫、研究成果が多くの参加者に共有されたことを嬉しく思います。いずれの演題も、現場の実践と課題意識に根ざした内容であり、今後もこうした発表の機会が実務や研究の一助となり、がん登録業務やがん登録情報を活用した研究活動が継続的に発展していくことを願っております。



国際交流委員会 セッションのご報告

MATSUZAKA Masashi

松坂 方士

弘前大学 / JACR 理事



CONCORD プログラムとはロンドン大学衛生熱帯医学大学院が主導する世界的ながん生存率解析の取り組みです。その特徴は、住民ベースがん登録（日本ではかつての都道府県がん登録、現在の全国がん登録）データを利用して、がん医療だけではなくがん対策の全般を評価対象にしていることや、がん生存率の推移を定期的に観察することなどがあげられます。また、参加する全ての地域の生存率を同一の手法で算出するため、極めて信頼性の高い国際比較となっています。

現在、結果が公表されている直近の研究は CONCORD-3 研究（第三次研究）であり、2000-2019 年に診断された成人（15-99 歳）15 部位（食道、胃、結腸、直腸、肝臓、膵臓、肺および気管支、皮膚の悪性黒色腫、乳房、子宮頸部、卵巣、前立腺、脳腫瘍、骨髄腫、悪性リンパ腫）、小児（0-14 歳）3 部位（脳腫瘍、急性リンパ性白血病、悪性リンパ腫）を対象に、5 年純生存率が算出されています。純生存率とはがん登録データの他に対象地域の生命表などを使って計算されるもので、他の死因の影響を除外してがん生存率のみを評価することができます。今回のセッションでは CONCORD-3 研究に参加した 71 か国 322 がん登録のうち、日本から参加した 16 府県がん登録（宮城、秋田、山形、栃木、群馬、茨城、神奈川、新潟、福井、山梨、愛知、大阪、兵庫、広島、愛媛、佐賀）を一つにまとめたデータでの 5 年純生存率について報告しました。座長は放射線影響研究所・杉山裕美先生と神奈川県立がんセンター・渡邊要先生が務められました。

第 1 席は弘前大学・松坂から、胃がん 5 年純生存率の経年変化をご紹介しました。胃がん患者全体（ICD-O-3: 局在 C16.0-C16.9、血液腫瘍を除く）の純生存率は上昇しており、進展度「領域」がんや遠位がん（ICD-O-3: C16.2-C16.6）の患者でも同様に上昇しています。その一方で、「限局」がんや「遠隔」がん、近位がん（ICD-O-3:

C16.0-C16.1）では上昇はみられませんでした。これらから、胃がん患者全体での純生存率の上昇は術後化学療法の進展によるものであると考察しました。限局がんでは既に十分に高い生存率が得られている一方で、遠隔がんの 5 年生存患者を増加させるほどの化学療法の進展はみられていないと考えられます。また、近位胃がんに含まれている食道胃接合部がん（ICD-O-3: C16.0）では標準的な治療がまだ確立していません。そのため、生存率が上昇するほどの治療レベルの向上がなく、近位胃がんとしての生存率の向上に至らなかったと推測しました。

第 2 席は埼玉県立大学・大木いずみ先生から結腸・直腸がん患者の純生存率の経年変化をご紹介いただきました。結腸がん（ICD-O-3: C18.0-C18.9, C19.9）、直腸がん（ICD-O-3: C20.9, C21.0-C21.8）のいずれも 5 年純生存率の上昇が観察され、治療が進歩したものと考えられました。また、大腸がん検診の受診率も向上していることから、早期発見の患者が増加したことも生存率が上昇した理由の一つと思われました。その一方で、高齢患者の生存率が他の年齢層と比較して低く、改善しないことが問題点として挙げられました。高齢者は併存症などの身体的な状況から標準的な治療や積極的な治療を受けない割合が高いことが原因と考えられますが、このこと自体は避けられません。そのため、今後はライフステージに応じた療養環境の支援などのがん対策を充実させる必要があると考察されました。

現在、日本から 20 道府県がん登録と全国がん登録が参加した CONCORD-4 研究（第四次研究）は集計、解析作業が終了し、研究論文の作成作業中です。全日本をカバーすることとなったほかに、CONCORD-3 研究よりも登録データの悉皆性・妥当性の精度が高まっていることから、今回は日本の現状をさらに反映した結果が出るものと期待されます。このような国際的な研究による評価を通して、日本のがん対策が向上し、よりよい社会が実現されることを願います。



患者、市民と共にがん登録データを 地域のがん対策に役立てよう

ITO Yuri

伊藤 ゆり

大阪医科薬科大学
J-CIP委員会委員長

JACR2025 愛知の締めくくりの時間帯に、J-CIPセッションとして「患者、市民と共にがん登録データを地域のがん対策に役立てよう」を開催いたしました。今回は地域での事例紹介と患者支援のお立場からがん登録情報に対する素朴な疑問や期待することについてご発言いただきました。

四国がんセンター寺本典弘先生から、愛媛県では2013年頃より院内がん登録情報を全県的に詳細に分析した結果を提示・活用し、行政担当者や病院関係者と共有しており、2016年頃から患者さんにわかりやすい情報発信を患者会の方とともに進めてきた「がんサポートサイトえひめ」の事例を紹介いただきました。「がん登録は鏡のようなもので、事実を映し出すので文句を言ってもしょうがない」という言葉が印象的で、関係者とともに超えるべきハードルをデータとして共に認識し、改善点つなげていくための活用事例が紹介されました。

群馬大学片山佳代子先生からは、患者会の方とともに作り上げている神奈川県のがん情報発信サイト「J-CIP 神奈川」を紹介いただきました。患者会の方々が記事を書き、ボタンをつないでいく形式で、県内のほぼすべての患者会の方からの記事が既に一巡して掲載されているとのことでした。群馬県では群馬大学の学生さんが、生存率について学んだことや市町村のがん検診はどうやって受診するのかなど、学生目線で情報発信に取り組んでいる内容が紹介されました。

特定非営利活動法人 ミーネット花井美紀さんからは、患者さんの相談から問題提起をいただきました。在宅医療へ移行された患者さんがその後、状況が改善し、久しぶりにご挨拶に受診したところ、担当医師に驚かしてしまったという経験から、患者さんのその後の転帰の状況は医療機関には連携されないのかという疑問です。これは、がん登録を用いた生存率の計測の確からしさにもかかわるのではというご質問です。会場にいた国立がん研究センター中林愛恵先生より、がん登録における生存・死亡の状況は医療機関からの報告ではなく主として死亡票からの把握となっているため、生存率計測は正確になされているもの

の、がん登録情報を提供した医療機関への死亡情報の提供や他施設との共有に関しては現行の法律では課題があり、現在変更に向けた議論が行われている旨、回答いただきました。花井さんの「長年かかった医師が患者の生死の状況を知らないことは寂しい。また地域の連携としても必要な情報では」というお言葉が印象的でした。

一般社団法人 仕事と治療の両立支援ネットブリッジの服部文さんは、若いがん患者さんの就労支援を行う中での疑問点をいただきました。がんを経験された後、進学・就労における困難感を抱える方が多いということが課題となっており取り組んでいるが、がん登録だと若くしてがんになる人がこのくらいいるという情報はあるが、がん罹患後、その方々がどうされているかの長期フォローアップの状況が明らかにならないのではないか、という課題提起です。例えば、がん登録とレセプト情報をリンケージできれば、がん罹患後の加入保険情報により、どのような就労ができているのか、また、他の問題が生じていないかなどの確認ができるのではないかとのご提案でした。会場の西野理事長より、がん登録が他の医療情報とのリンケージによる活用が可能になるようがん登録推進法の改正案として要望し、国会での議論が今後進む予定である旨、回答されました。服部さんの「患者の声なき声を拾うことができるのががん登録情報ではないか」という激励のお言葉をいただきました。

最後に共同座長をおつとめいただいた花井さんより「医療の進歩により、患者はがんと長く向き合う時代となり、患者が社会の中でどう生きるのかを模索する上で正しい羅針盤たるがん登録となってほしい」という期待のお言葉で締めくくっていただきました。学術集会最後のセッションでしたが、満席の第一会場で熱気ある議論が行われ、今後の患者さんや社会のためのがん登録の在り方について改めて関係者一同で考えるよい機会となりました。本セッションの開催をさせていただきました大会長の伊藤秀美先生はじめ、ご登壇いただきました皆様はじめ、関係の皆様にご感謝申し上げます。



がんサポートサイトえひめ

<https://e-cip.jp/>

J-CIP 神奈川

<https://npo-jacr.jp/j-cip/kanagawa/>

特定非営利活動法人 ミーネット

<https://me-net.org/>

一般社団法人 仕事と治療の両立支援ネットブリッジ

<https://bridge-nagoya.jp/>

がん登録推進法改正の現状

NISHINO Yoshikazu

西野 善一

金沢医科大学 / JACR 理事長



がん登録推進法の附則第4条には施行後5年後の見直し規定があり、厚生科学審議会がん登録部会での議論が進められてきました。2023年10月には現状における全国がん登録および院内がん登録制度の課題を「全国がん登録及び院内がん登録に係る課題と対応方針 中間とりまとめ」として公表し、その後は同とりまとめをふまえた具体的な対応についての検討が行われました。2024年11月25日に開催された第30回がん登録部会で、見直しを行う項目が「医療DXの取組の一環として行う項目」と「がん登録制度における運用の見直し項目」に整理されました。その後、前者を実施するにあたって必要な法改正の内容を含んだ「医療法等の一部を改正する法律案」が本年2月に国会に提出され、現在、継続審議となっています。

法律案のうちがん登録に関連する内容として重要な点の1つは、がん登録と国が保有する他の医療・介護関係のデータベース(公的DB)の仮名化情報(氏名等は削除するが医療データ領域の削除・改変は基本的に不要)との連結解析を可能とする点です。連結には被保険者番号を収集の上活用することが想定されており、収集された被保険者番号(から生成されるID)は、届出の審査・整理(名寄せ)にも利用できるようになります。また、住所異動確認調査の円滑化を図るために、届出事務において国立がん研究センターと都道府県が住基ネットを利用することを可能とする住民基本台帳法の改正が含まれています。

これに対して、がん登録部会で「がん登録制度における運用の見直し項目」とされた点は、「法20条の規定により提供される生存確認情報の取扱いに対する対応」と「国外提供に係るルールの整備」があり、本年4月に公表された「全国がん登録 情報の利用マニュアル 第1版」と「全国がん登録 情報の提供マニュアル 第5版」に具体的な内容が記載されました。病

院等が提供を受けた生存確認情報の取扱いのうち、臓器別がん登録などへの第三者提供については、死亡日、最終生存確認日を診断日等からの日数(期間)に変換した上で提供することが認められました。ただし提供を受ける側は元の死亡日等の情報が復元できないように保有する診断日等の「年月日」のうち「日」の情報を削除することが条件となります。また、死因については原死因を「がんによる死亡」または「がん以外の死亡」に置換して提供することが認められています。さらに診療録への転記は、第三者への提供可能な条件を満たした情報(生死の別、置換した後の死因)について記載することが認められます。国外提供に係るルールの整備については、国外の提供先は法第17条または第18条に該当する国、都道府県から調査研究の委託を受けたか、共同して調査研究を行う者で、かつ外国政府か日本が加盟している国際機関等の公的機関に限られます。その上で、国内の提供依頼申出者が国外の提供先における情報管理等について共同責任を負う等の提供要件を満たす場合に匿名化された情報について国外提供が可能とされています。

このほか、死亡場所に関する情報とTNM分類の全国がん登録への追加が本年8月4日のがん登録部会で議題として取り上げられ、今後国立がん研究センターが設置しているがん登録標準化専門委員会で検討されることになりました。このうち死亡場所の情報の追加は、日本がん登録協議会が他の8団体・学会との連名で本年1月27日に国に提出した「がん登録推進法改正に関する要望書」において要望したものです。

日本がん登録協議会は今後も法改正の進捗についての情報提供を行うとともに、がん登録データの利活用を推進するための取り組みを引き続き進めます。



1. 厚生労働省. 厚生科学審議会(がん登録部会).

https://www.mhlw.go.jp/stf/shingi/shingi-kousei_208254.html



2. 厚生労働省. 医療法等の一部を改正する法律案.

<https://www.mhlw.go.jp/stf/topics/bukyoku/soumu/houritu/217.html>



3. 厚生労働省. 国立研究開発法人国立がん研究センター. 全国がん登録 情報の利用マニュアル 第1版.

<https://www.mhlw.go.jp/content/10900000/001469687.pdf>



4. 厚生労働省. 国立研究開発法人国立がん研究センター. 全国がん登録 情報の提供マニュアル 第5版.

<https://www.mhlw.go.jp/content/10900000/001507992.pdf>



5. 日本がん登録協議会他. がん登録推進法改正に関する要望書.

https://np-jacr.jp/0_cms/wp-content/uploads/2025/02/がん登録推進法改正要望書-1.pdf

参考資料

第35回 学術集会大会長

OSAKI Yoneatsu

尾崎 米厚

鳥取大学



日本がん登録協議会 学術集会のご案内 第35回

2026年6月11日(木)～13日(土)に、鳥取県米子市にて第35回日本がん登録協議会学術集会を開催いたします。会場は、JR米子駅から徒歩圏に位置する「米子市文化ホール」です。

本大会のテーマは、「がん登録情報のその先へ～科学と政策をつなぐ架け橋～」です。全国がん登録制度の開始から10年を迎える今、がん登録情報は「収集・整備する」段階から、「科学的知見の創出と政策形成に活かす」段階へと、質的転換を求められています。現場の実務者、研究者、行政担当者、政策立案者が分野の垣根を超えて情報を共有し、がん対策の未来を共に形づくる——本大会ではそのような橋渡しの場となることを目指しています。

今回も、例年ご好評をいただいている実務者研修会と実務者の情報交換の場「実務でGo!」を大会初日(11日)午後を開催いたします。全国の現場でがん登録に取り組む皆さまにとって、日々の業務に直結する実践的な知見の共有と学びの機会となるよう、内容の充実を図ってまいります。

12日午前中から始まります学術大会本体では、従来のような協議会の各委員会によるシンポジウムに加え、新たに設置された「利活用委員会」との共同企画によるシンポジウムも検討中です。また従来のように口頭演題発表、ポスター発表のセッションもごさいます。登録情報の「使われ方」や「使われるべき未来」をめぐる、より多角的な議論が展開されることを期待しています。また、本大会では「学会長講演」は設けず、その代わりに山陰にゆかりのある識者による「平和」をテーマとした特別講演を現在交渉中です。

がん対策やがん予防を考える前提の最も根本的な土台には「平和」があると考えます。平和を達成するための方法につながる貴重な実例を共有

できればと願っています。

開催地となる米子市は、鳥取県西部の中核都市であり、「大山と中海、日本海に囲まれた自然と人のまち」です。交通アクセスにも恵まれ、空路、鉄路等を利用して、全国からのアクセスが可能です。米子市内には、最近人気が高まっている米子城址、皆生温泉が、隣接自治体には、ゲゲゲの鬼太郎ロード、初夏の秀峰大山、足立美術館・加納美術館等、豊富な観光資源が揃っています。また、食の楽しみも多く、山陰の多彩な海の幸、果物等の農作物、鳥取和牛等をお楽しみいただけます。水と緑の風景に包まれた穏やかな環境のなかで、学びと交流のひとつときをお過ごしいただければ幸いです。「情報交換会」は、限られた予算の中でご満足いただけるよう、キッチンカー等による緑日方式を検討中です。

第33回(出雲市)に続き山陰での開催となりますが、米子周辺には、多くの観光資源がありますし、少し足を延ばせば「まんが王国とっとり」を感じられる観光スポットもございます。是非とも多くの方に現地参加をしていただき、鳥取県内に宿泊していただきますようお願い申し上げます(県の補助金獲得のためにも)。この地に皆さまをお迎えできることを、地域の関係者一同、心より楽しみにしております。

日本のがん登録のさらなる発展のために、本大会が実り多い機会となるよう準備を進めてまいります。全国の皆さまのご参加を心よりお待ちしております。



<https://www.jacr2026.net>



日本がん登録協議会 第35回学術集会 米子大会

がん登録情報のその先へ
～科学と政策をつなぐ架け橋～



開催期間 2026年6月11日(木)～13日(土)

会場 米子市文化ホール 尾崎 米厚

鳥取大学医学部 社会医学講座 癌予防医学分野
〒685-0502 鳥取県米子市南町506
TEL 0859-35-6103 FAX 0859-35-6100 E-mail: xxxxx@doctor.u-bi.ac.jp

鳥取大学医学部 社会医学講座 癌予防医学分野
〒685-0501 鳥取県米子市南町506-5
TEL 0859-48-0700 FAX 0859-48-0600 E-mail: jacr2026@u-bi.ac.jp

がん登録データによる 国際共同研究の成果報告会 in 弘前

SUGIYAMA Hiromi

杉山 裕美

放射線影響研究所
JACR 理事



2025年5月9日、弘前大学医学部コミュニケーションセンターにて「がん登録データによる国際協同研究の成果報告会」が開催されました。青森県、愛知県、栃木県、大阪府、広島県、長崎県の登録室研究者が参加し、JACR 理事長の西野先生も出席されました。

冒頭では松坂方士先生が報告会の趣旨を説明し、続いて杉山が CONCORD プログラムの概要とその意義を紹介しました。CONCORD-4 でイギリスのロンドン大学衛生熱帯医学大学院 (LSHTM) ヘデータを提出した際、国際交流委員会がサポートし、海外とのデータ共有ルールがまだ整備されていない中で、20 道府県と国立がん研究センターが情報提供の申出をし、審議・承認を経て提出した経緯を振り返りながら報告しました。さらに進捗報告として、LSHTM で行われたデータ品質チェックの結果が各がん登録室にフィードバックされ、その確認・必要に応じた修正を通じて、LSHTM と日本のがん登録室の間でやり取りが進められ、研究活動ががん登録データの品質向上に貢献していることが示されました。愛知県がんセンターの尾瀬功先生は、Japanese Journal of Clinical Oncology の Japanese CONCORD-3 Monograph の肺がん研究を担当され、日本の肺がん生存率が世界的に高いことが報告されました。会議の後半では、現在進行中の CONCORD-4 におけるデータ品質チェックの感想や意見が共有されました。また、2025 年 4 月に発行された「全国がん登録情報の利用マニュアル」では、がん登録推進法第 17 条（厚生労働大臣による利用等）および第 18 条（都道府県知事による利用等）に基づく匿名化された全国がん登録データの利用について、5大陸のがん罹患や CONCORD プログラムへの共有が認められることが明記されました。しかし、第 21 条による研究者の利用では海外とのデータ共有が認められず、今後の国際共同研究の進め方に多くの課題があることを参加者で改めて確認しました。



上段）中田佳世、尾瀬功、杉山裕美、松尾恵太郎、下段）大木いづみ、松坂方士、西野善一、伊藤秀美。松坂先生の教授就任お祝いの胡蝶蘭と一緒に撮影。



空港からの道沿いにはリンゴ畑が続き、ちょうどリンゴの花が満開でした。

音楽と私



Vol.03
September. 2025

大木 いずみ 埼玉県立大学 / JACR 理事



私

が子供のころは、ピアノ教室やスイミングスクールに通うという「習い事」が流行っていました。両親は文化的な生活に憧れて、私の熱心な頼みをきいてくれました。私は団地の畳の部屋にアップライトのピアノを無理やり設置してもらい、近所のピアノ教室に通い始めました。

子供ながらに友達がやっているピアノを自分もやりたいし、褒められたらそれなりにうれしく、もっと上手になりたいと思うようになりました。一方、体力づくりに通わされた水泳は、「やる気があるのか」とコーチに叱られてばかりでした。今思うと私の時代は「スパルタ教育」が主流でした。

父の仕事の関係で小学校3年生からアメリカのミネソタ州（田舎町）に住むことになりました。当時のその地域には日本語学校もなく、現地の小学校の日本人（日本語が通じる）は、私と妹の2人だけでした。そのような環境で、父にピアノが欲しいと言ったところ、子供用サイズのバイオリンを購入してくれ、先生もつけてくれました（後に近所の親切な方が、ピアノを譲ってくれてピアノも習うことができました）。

音楽に言葉はいりません。楽譜は世界共通ですし、合

奏や伴奏はなんとなく伝わるものです。当時の日本の音楽教育とは全く異なり、かなり自由な環境で、「音楽は楽しい」ことを知りました。

帰国して、周りの子供のピアノの技術や勉強の知識量に驚きましたが、その分音楽を楽しめるようになりました。大学で初めて一人暮らしをするときも、バイオリンやピアノを弾くことで気分転換ができたし、共通の趣味からたくさんの人と交流しました。大学ではオーケストラに入り合宿や演奏会を満喫しました。夏休みには全国の医学生が集まってオーケストラを結成し、演奏会をするイベントに参加しました。

社会にでてからは、趣味からは遠のいていましたが、折にふれて音楽を楽しんでいます。写真は、前の職場で患者さん達と音楽会を開催したときのものです。仲間と時間をつくって準備し、本番の最後はみんなと合唱です。

同じ時間を「音楽」という共通のもので、様々な人と楽しめるのは素晴らしいです。性別、年齢、言葉を超えてつながれると思います。

音楽に定年はありません。一生楽しくかかわっていきたいものです。

九州がんセンターについて

当院は 1972 年に国立病院九州がんセンターとして設立され、現在は独立行政法人国立病院機構が運営する 411 床のがん専門病院です。九州全域から患者が集まる高度専門医療施設であり、診断から治療、緩和ケアまで幅広い医療を提供しています。臓器別の診療科が充実し、外科・内科・放射線治療科が連携した集学的治療を実践していることが特徴です。また、治験・臨床試験やトランスレーショナルリサーチにも積極的に取り組み、新しい治療法の開発と普及に努めています。国が指定する「都道府県がん診療連携拠点病院」として、福岡県のがん医療を牽引する役割を担っています。長年にわたり、拠点病院の責務として精度の高い「院内がん登録」を実践し、自院のがん医療の質の評価・向上に努めてまいりました。この臨床現場に根差した登録業務の経験と専門知識が、私たちの強みです。

福岡県のがん登録事業と 福岡県がん登録室について



福岡県は、地域がん登録事業を平成 23 年 8 月に開始し、2011 年診断症例から（拠点病院は 2009 年診断症例から）登録を行っています。この度、2024 年 5 月をもちまして、これまで福岡県保健環境研究所が担ってこられた福岡県の全国がん登録事業を、当センターが引き継ぎ、「福岡県がん登録室」として新たに業務を開始いたしました。院内では、がん統計センター下に院内がん登録室、全国がん登録室と別組織として構成されています。全国がん登録室としては、室長 1 名、室員 5 名の計 6 名で実務を担当しています。

現状と課題

長きにわたり本事業の礎を築いてこられた福岡県保健環境研究所の皆様には、心より感謝申し上げます。そのご尽力により整備された登録基盤を円滑に継承し、臨床現場の知見を最大限に反映させることで、より質の高いがん登録システムを構築することを目指します。新体制への移行に伴い、私たちが取り組むべき課題は明確です。まず、県内多数の医療機関との連携をさらに密にし、がん登録を適切に実施する人材育成を含めた届出の促進と質の均てん化を図ることです。2020 年（令和 2 年）罹患症例における登録精度 DCO1.9%、MI 比 0.41 を中心とした精度管理指標の維持改善に継続的に取り組む必要があります。そして最大の課題は、第 4 期福岡県がん対策推進計画に基づき、収集したデータを単なる統計情報に留めず、「生きた情報」として県のがん対策、臨床研究、そして県民への情報提供へと戦略的に活用していくことです。当センターが持つがん診療の専門知識を活かし、病期分類や治療内容の正確性を高め、データの価値を最大化してまいります。

最後に

福岡県のがん対策を根底から支えるこの重要な事業を担うにあたり、身の引き締まる思いです。また、全国がん登録の業務を進めるにあたり、施設見学やご助言など多数ご協力いただきました。この場を借りてお礼申し上げます。今後は、日本がん登録協議会の皆様からのご指導ご鞭撻を賜りながら、職員一同、事業の発展に全力で取り組んでまいります。皆様の変わらぬご支援とご協力を賜りますよう、心よりお願い申し上げます。

全国がん 登録室 紹介



国立病院機構
九州がんセンター
全国がん登録室

福岡県は九州北部に位置し、人口約 509 万人（令和 7 年 8 月）を擁する九州最大の県です。北九州市、福岡市の両政令指定都市を含む 60 の市町村で構成され、地理的、歴史的、経済的、社会的特性などから、大きく、北九州、福岡、筑後及び筑豊の 4 地域に分けられます。県内には九州大学病院、九州がんセンターの県がん診療連携拠点病院 2 カ所、21 の地域がん診療連携拠点病院、1 つの地域がん診療病院が指定され、24 施設からなる包括的ながん診療ネットワークを形成しています。

2025,09 fukuoka

わずか6mLの採血でリスクを見える化

～今、知ることが、あなたを守ります～

がん リスク検査 対象 20～80歳
 部位ごとのリスクを評価
 19,800円(税込)

共同研究 神奈川県立がんセンター・千葉県がんセンター

認知 リスク検査 対象 50～80歳
 MCI(軽度認知障害)リスク
 19,800円(税込)

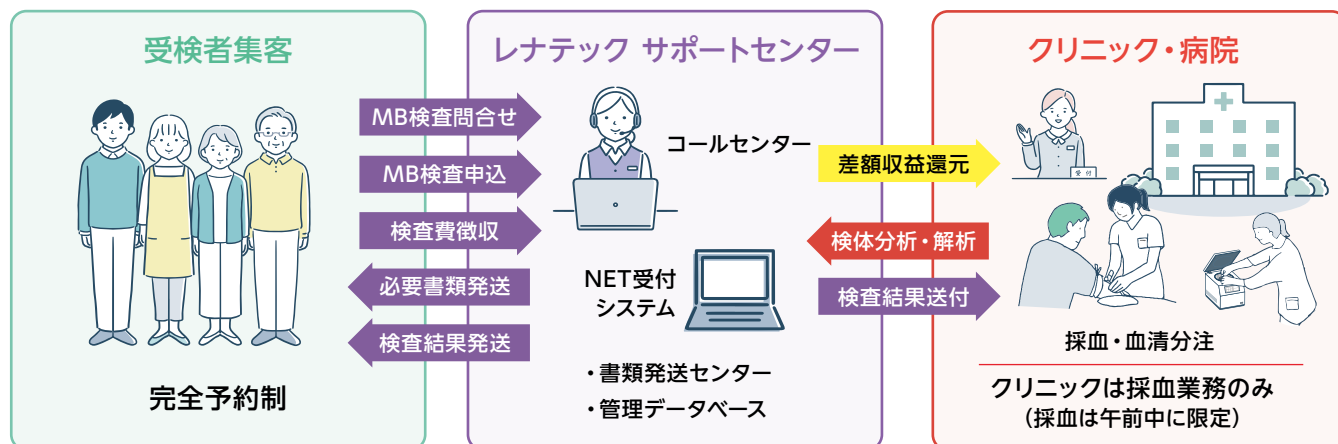
研究助成 経済産業省Go-Tech事業



MCIのうちに対策すれば回復の可能性も！

メタロ・バランス検査を導入しませんか？

MACサービス (Medical Assist Contract) で楽々導入！



MACサービスの特長

- ① 集客・予約、事前問合わせにも対応
- ② 検査資料の事前送付、検査結果送付も対応
- ③ 検査後の請求書発行と回収も対応
- ④ 医療機関へは、検体検査料など差引、差額をお振込
- ⑤ 検査結果のご相談もコールセンターが対応
- ⑥ 1年後の検査ご案内も対応



詳しくはMB検査導入サイトをご覧ください

URL <https://mb.renatech.co.jp/>

事前にお決めいただくこと

- ① 検査の採血日程と予約時間・予約可能人数

予約例	ご注意：採血は、午前中のみとなります。		
採血日	9時～10時	10時～11時	11時～12時
9/2	5人	5人	3人
9/10	3人	3人	2人

- ② 検査種類の決定 がんリスクのみ、認知リスクの両方

- ③ 遠心分離器の有無

遠心分離器が無い場合は、遠心分離器分割払い購入が可能です。
 一定期間検査料から分割払金を差引いてお支払いいたします。



Renatech レナテック
Recycling・Ecology for Nature Technology

検査会社 株式会社レナテック 神奈川県伊勢原市高森4-19-15
 ☎ 0120-785-602 受付／平日9:00～17:00 (土・日・祝休み)



私たちは日本がん登録協議会を支援しています

がん登録の充実と支援を願い当協議会の活動に賛同、ご支援頂いている賛助会員（団体・個人）の皆様です。



日本医師会



三井住友海上あいおい生命



社団法人 全日本コーヒー協会



公益社団法人
日本薬剤師会
Japan Pharmaceutical Association



公益財団法人
日本対がん協会



大鵬薬品



第一三共株式会社



東京海上日動
あんしん生命



東京海上日動
火災保険



サイニクス株式会社



群馬県病院協会



公益社団法人 全国自治体病院協議会
JMHHA JAPAN MUNICIPAL HOSPITAL ASSOCIATION

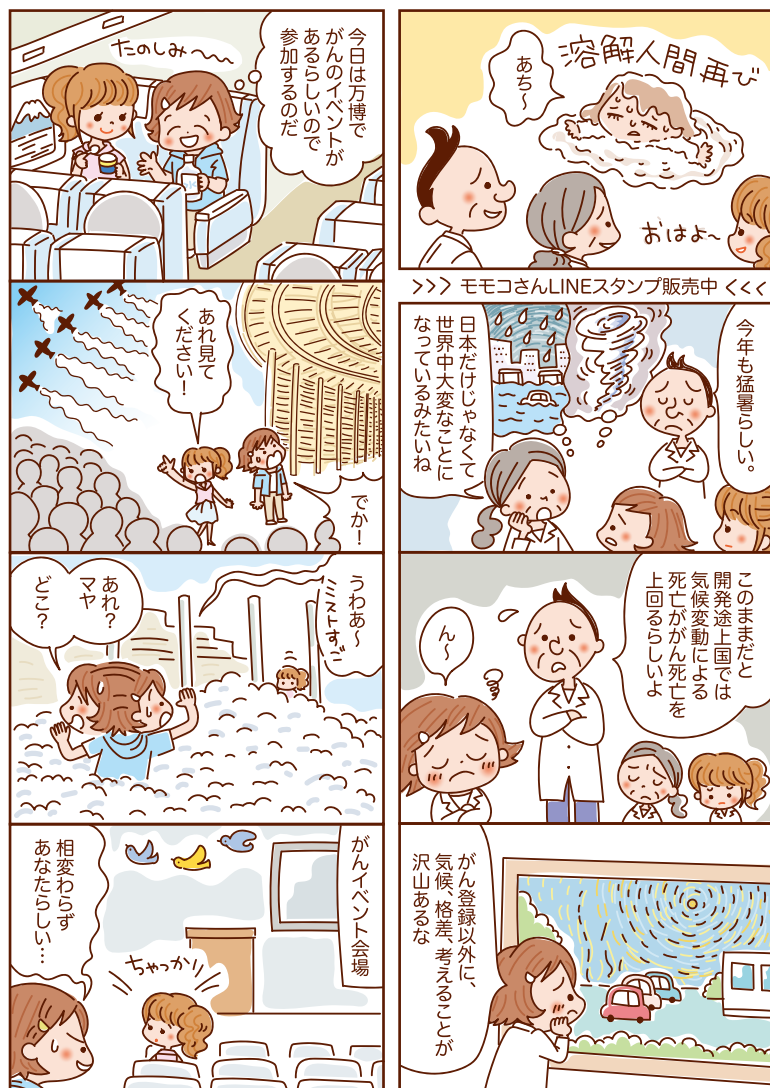
■賛助会員（24 団体）

（公社）日本医師会【4口】、アフラック生命保険（株）【3口】、（公社）日本歯科医師会、味の素（株）、（株）レナテック、富士フイルムメディカル（株）、三井住友海上あいおい生命保険（株）、（一社）全日本コーヒー協会、（公社）日本薬剤師会、ファーマインターナショナル（株）【2口】、（公財）日本対がん協会、アストラゼネカ（株）、大鵬薬品工業（株）、第一三共（株）、東京海上日動あんしん生命保険（株）、東京海上日動火災保険（株）、サイニクス（株）、MSD（株）、（株）キャンサーズキャン、メルクバイオファーマ（株）、ファイザー（株）、武田薬品工業（株）、（一社）群馬県病院協会、（公社）全国自治体病院協議会【1口】

■個人賛助会員（5名）

第49話 万博編

第50話 猛暑編



登場人物



百田モモコ

着任1年目の
がん登録実務者



佐々木マサコ

モモコさんの上司



真山マヤ

モモコさんの妹分



高城先生

登録室担当医師

田中編集委員

今号の原稿を先生方に執筆頂いた時期は7月下旬で、その頃には北日本の青森県でも35℃以上の猛暑日が何回ありました。青森では無縁だったので初めて知ったのですが、気温が35℃以上では猛暑、40℃前後では酷暑と呼ぶそうですね。酷暑だった地域の皆様もいらっしゃるのではないのでしょうか。そんな厳しい暑さの中、快くご執筆くださった先生方に深く感謝申し上げます。今号が皆さまの元に届くころには、暑さが少しでも和らいでいることを願っています。

尾瀬編集委員

今号から編集委員になりました、愛知県がんセンターの尾瀬です。私も運営に関わりました愛知の学会集が無事に終わり、一安心していたところですが、学会集の記事を拝見して、当日の楽しかったり大変だった諸々を思い出しました。これから皆さんに楽しんでいただける紙面作りに貢献していきたいと思っています。ご要望などありましたら遠慮なくお知らせください。

事務局便り

認定特定非営利活動法人 日本がん登録協議会 事務局：中村 藍海

まだまだ暑い日々が続いておりますが、皆様いかがお過ごしでしょうか。

6月に愛知県で行われた学会集も無事盛況のうちに幕を閉じました。開催にあたってご尽力いただいた皆さま、本当にありがとうございました。

学会集は現地のスタッフさんと密に関わらせていただくので、休み時間の合間に地元の方々がおすすするグルメや観光名所をお聞きするのが毎度の楽しみです。今回は叶いませんでしたが、次に名古屋に出向いた際は、ぴよりんチャレンジに挑戦してみたいと思っている私です。

私たちの活動にご協力ください

賛助会員(個人・団体)を随時募集しています

賛助会員

個人/年間5千円

団体1口/年間5万円(1口以上)

寄附金も受け付けています

<https://syncable.biz/associate/jacr199212/donate>



入会のお申し込み、寄附金のお問い合わせは
弊会ウェブサイトの(<https://npj-jacr.jp/>)
「お問い合わせ」よりお気軽に
お問い合わせください。

主な事業内容

- がん登録に関する学会集、セミナー等の開催
- がん登録に関する様々な情報の提供
- がん統計、がん登録に関する調査や研究の実施
- 国際がん登録協議会(IACR)への参加・協力
- がん登録に携わる人材の育成やサポート
- がん登録室の安全管理措置に関する活動
- がん登録の広報媒体、冊子、教材、資料等の発行



認定特定非営利活動法人

日本がん登録協議会

JACR Japanese Association of Cancer Registries

日本がん登録協議会事務局 理事長 西野 善一

〒104-0045 東京都中央区築地4-10-16 築地MSビル4階B

TEL: 03-3547-5992 FAX: 03-3547-5993

E-mail: contact@npj-jacr.jp URL: <https://npj-jacr.jp/>